

年度 2009 学期 後期	曜日・校時 火1	必修選択 選択	単位数 2
授業科目/(英語名)	経済と経営(食料経済学) Economics and Business(Food Economics)		
対象年次 1・2年次	講義形態 講義	教室	
対象学生(クラス等) 全学部	科目分類 人文・社会科学科目		
担当教員(科目責任者) / Eメールアドレス/研究室/TEL/オフィスアワー 担当教員: ガンガ 伸子 / Eメールアドレス: tnobuko@nagasaki-u.ac.jp / 研究室: 教育学部ガンガ伸子研究室 / TEL:(直通)095-819-2370 /オフィスアワー: 毎週火曜日 10:30~11:30			
担当教員(オムニバス科目等)			
授業のねらい/授業方法(学習指導法)/授業到達目標 授業のねらい: わたしたちは、生活を維持するために、毎日たくさんの財やサービスを消費している。なかでも、食料は生存のために、なくてはならない基本的な消費財である。この講義では、食料の生産から消費者に至るまでのフードシステムの仕組みと、そのなかで起こっている問題について解説する。 授業方法: 毎回、設定したテーマに関して、教科書に沿って、解説する。 授業到達目標: わが国における食生活の成熟が何を意味するものであったのかを、考察することができる。フードシステムの直接の担い手である農業、食品工業、食品流通業、外食産業の役割を検討することができる。食料の安全保障や自給率の問題、世界の人口と食料問題について考えることができる。フードシステムがうまく機能するために、政府は何をするべきかについて考えることができる。			
授業内容(概要) / 授業内容(毎週毎の授業内容を含む) 授業内容(概要) 食料の生産から消費者に至るまでのフードシステムの仕組みと、そのなかで起こっている問題について、毎回テーマを設定して解説していく。 第1回目 イントロダクション: 食料経済の発展を、自給自足の段階から現在の段階までの変化を整理する。現在の段階は、前段階とは異なり、食生活の外部的化が進んで複雑になっており、フードシステムという新しい概念が生まれた。食料の流れを、消費者から生産の方向にたどり、総合的にとらえようとするフードシステムの仕組みについて学習する。 第2回目 フードシステム: 日本経済において、フードシステムがいかに重要な位置を占めているか、また、近年、フードシステムはどのように変化しているかを統計資料から学習する。 第3回目 食料経済の理論: 食品の商品としての特徴(必需性、飽和性、安全性、生鮮性、習慣性など)について学習する。 第4回目 食料経済の理論: ミクロ経済学の消費者選択の理論を使って、食品選択の理論(予算線、無差別曲線、消費均衡点)について学習する。 第5回目 食料経済の理論: 需要曲線、需要の価格弾力性、所得弾力性、エンゲル係数について学習する。また、豊作であるにもかかわらず、通常より農家の収入が減ってしまうという豊作貧乏という現象がなぜ起こってしまうかを考察する。 第6回目 食生活の変化: 現在に至るまで、わたしたちの食生活はどのように変化してきたかを理解する。1960年頃から1970年代前半までの期間を対象に、量的に拡大した食生活の変化の特徴を理解する。また、1970年代半ばから現在に至るまでの食生活の変化を理解する。質的に大きく変化しており、食の高級化、多様化、簡便化、健康・安全指向などの食生活の方向を示していることを学習する。 第7回目 食生活の変化: 何が食生活の変化をもたらしたかについて、経済的要因(所得、価格)と非経済的要因(女性の社会進出、世帯規模の縮小などの家族の変化)から学習する。 第8回目 食料の安全保障と食料自給率: なぜ、日本の食料自給率は低いのかを理解し、わが国の食料の安全保障(フードセキュリティ)について学習する。 第9回目 食品工業の役割: 食品工業の現状や二極集中性などの特徴について学習する。 第10回目 食品流通業の役割: 生鮮食品の流通と卸売市場のしくみについて学習する。 第11回目 食品流通業の役割: 米の流通など、いくつかの食品の流通システムについて学習する。 第12回目 外食産業の役割: 外食産業の現状や特徴について学習する。 第13回目 世界の人口と食料: 世界には、飢餓と栄養不足に苦しんでいるひととびとが多くいる。世界の食料問題について学習する。 第14回目 食生活と政府の役割: 食料経済における政府の役割(安全性、食生活ガイドラインなど)について学習する。 第15回目 全授業の総括(試験含む)			
キーワード	フードシステム、消費、流通、生産		
教科書・教材・参考書	時子山ひろみ・荏開津典生著「フードシステムの経済学」医歯薬出版株式会社(2007年)		
成績評価の方法・基準等	定期試験(ノート・教科書等持ち込み不可)80%、授業への貢献度20%		
受講要件(履修条件)			
本科目の位置づけ/学習・教育目標			
備考(準備学習等)			